

Title	土偶の大量出土について：岩手県九年橋遺跡を例として
Sub Title	Clay figurines (土偶) excavated from Kunembashi site, Iwate
Author	藤村, 東男(Fujimura, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1999
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.68, No.1/2 (1999. 1) ,p.69- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19990100-0069">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19990100-0069</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 土偶の大量出土について

——岩手県九年橋遺跡を例として——

藤村 東 男

## 一、九年橋遺跡出土の土偶

岩手県北上市九年橋三丁目に存在する九年橋（くねんばし）遺跡は、岩手県中部を北から南に向かって流れる北上川に、西側から合流する和賀川の合流点近くの河岸段丘上に位置し、標高は約五十九メートルを計る。同遺跡は一九七三年から八六年までの十一回にわたって、北上市教育委員会が宅地造成に伴う緊急事前調査を行った結果、縄文時代晩期（主体は晩期後半の大洞C<sub>2</sub>式と同A式）の低湿地遺跡であることが判明した（北上市教委七七・七八・七九。八〇・八四・八五・八六・八七・八八・九一）。

同遺跡は、和賀川の旧流路の右岸に沿ってできたくぼ地に形成され、その範囲は東西約八十メートル、南北約

三十メートルの長楕円形をしたもので、推定面積は約二千百平方メートルと、比較的規模の小さな遺跡である（第十一次調査までの調査面積は千三百九十八平方メートルで、遺跡面積の約六十七%にあたる）。

検出された遺構は、低湿地にありながらも堅穴住居跡三基、石囲炉十三基、焼土堆積十八カ所、土壙二十基、配石三基、積石一基、溝二条など、居住や火の使用などの痕跡が認められた。なお、同遺跡に隣接する段丘上の数カ所に設けた試掘坑によれば、遺跡周辺は表土直下に和賀川の運搬堆積物である礫層が続き、遺構や遺物包含層は存在しないことと、遺跡の範囲は約二千百平方メートル以上には拡大しないことが確かめられている。

また、出土した遺物は、完形またはそれに準じた土器が三千六百八十五点、石製品四千二百四十七点、土製品

千五百八十九点、骨角製品九点が出土し、東北地方の縄文時代晩期を代表する遺跡になっている。なかでも、六百六十七点が出土した土偶は、山梨県東八代郡一宮町釈迦堂三口神原遺跡の九百二十点に次ぐ数で（第三位は岩手県稗貫郡大迫町立石遺跡の三百二点）、その後の土偶研究に大きな影響を与えることになった。

縄文時代の土製の女性像である土偶は、豊かな乳房や膨らんだ腹部によって妊娠、出産を連想させ、生命の誕生を祈る祭祀に用いられたものと思われる。九年橋遺跡から出土した土偶には、遺跡の成因にも関連する二つの特徴が認められる。そのひとつは、前述した膨大な数の出土点数であり、一平方メートルあたり〇・三点と驚異的な数値になっている。後に詳しく述べるが、これまでに知られている一遺跡あたりの出土点数は一ないし数点程度が一般的であり、六百点を超す点数はきわめて特殊で、例外的な数字である。なお、百点以上の土偶を出土した遺跡は、これまでに全国で十六カ所が確認されており、岩手県には七カ所が存在している。

もうひとつは、破損率の高さで、九年橋遺跡出土の土偶には全身の揃った完形の資料は一例もなく、すべてが頭や手足が欠けていたり、あるいは頭や手足のみになっ

ており、破損率は一〇〇%になる。なお、さきの十六カ所の遺跡でも土偶の破損率は高く、大量出土と破損率の高さとの因果関係が注目される。さらに、男性生殖器を模倣し、生殖に関係する祭祀に用いられたとする石棒、石剣、石刀（石剣類と総称される）も破損率が高く、六百十一點すべてが破損しており、祭祀の過程での意図的な破損を想像する向きもある。

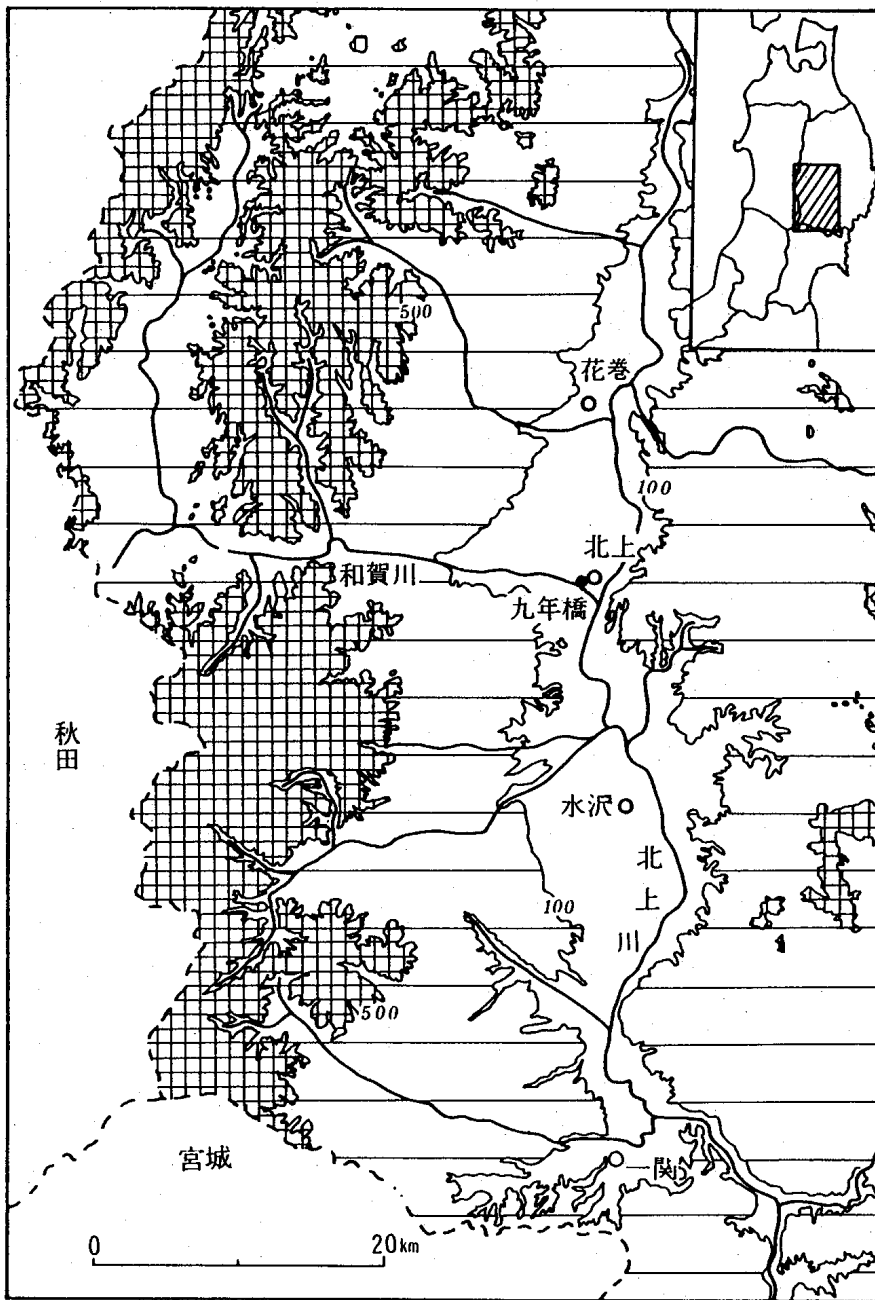
このように、九年橋遺跡からは膨大な数の破損した土偶が出土しているが、なぜこれほど大量の土偶が出土するのか、なぜすべての土偶が破損しているのか、などといった疑問が生じてくる。これらは、特定の遺跡での土偶製作や、あるいは複数集団での土偶祭祀など、重要な課題に結びつく可能性を持っている。そこで、筆者は本稿において九年橋遺跡での出土点数や破損状態などの吟味を通じて、土偶の大量出土の原因について考えてみることにした。<sup>(1)</sup>

## 一、土偶の大量出土

### a. 土偶の全国集成

九年橋遺跡からは、全国第二位の六百六十七点の土偶が出土した。この数がいかに膨大なものであるのかを、

土偶の大量出土について——岩手県九年橋遺跡を例として——



九年橋移籍の位置

他の遺跡出土資料と比較しながら示すことにした。比較に用いた各地の出土点数は、次のようにして求められたものである。

今から七十年前、甲野勇は全国の土偶の出土遺跡を集成し、初めて土偶の分布を明らかにした(甲野二九)。その内容は、中部高地、東関東、北東北の三カ所に集中するもので、今日知られているものと大差のないものであった。それから六十年後の一九八七年から九〇年にかけて、再び土偶の集成が行われた。それは、八重樫純樹と小林達雄を中心とする「土偶とその情報」研究会が、全国の研究者の協力を得て、これまでに出土したり、あるいは所蔵されたりしてきた資料のすべてを調査し、遺跡名や形態、文様などのさまざまな情報を国立歴史民俗博物館の大型計算機に入力し、将来に備えてのデータベース化を図ったものである(八重樫・小林九二)。

同研究会が収集した資料は、島根、徳島、沖縄を除く四十四都道府県の千三百七十遺跡から出土した一万六千八百八十三点に及んでいる(八重樫九二)。なお、この集成は一部に遺漏も予想されるが、その結果はこれまでの知見に抵触するものではなく、現時点ではもつとも信頼でききるものであり、これを利用して九年橋遺跡の出土点数

について考えてみることにした。

#### b. 出土地域と時期

「土偶とその情報」研究会の報告書は、遺跡ごとに時期別の出土点数が記されているので、これをもとに時期別の出土遺跡数と出土点数を求めたのが表1であり、次のような分布の変化を読み取ることができる。

#### ①土偶の出現期

早期の東日本において出現し、そのまま前期に引き継がれる。

#### ②量的な拡大期

中期の東日本においては出土遺跡数と出土点数が急速に増加する。

#### ③面的な拡大期

後期の西日本にも分布が広がり、晩期に引き継がれる。

このように、土偶は東日本の早期に出現し、中期以降に二度の拡大期を経て、全国に波及する。そのうち、中期は長野、山梨が、後期は茨城、岩手が、晩期は岩手がそれぞれ分布の中心地域になっており、九年橋遺跡は後期・晩期の中心地域である岩手県内に存在する。

表1 時期別の出土遺跡数と出土点数

	出土遺跡数							出土点数						
	早期	前期	中期	後期	晩期	他	合計	早期	前期	中期	後期	晩期	他	合計
北海道		1	12	18	44	8	74		2	39	48	193	11	285
青森	1	2	18	34	45	7	75	1	2	105	207	306	12	629
岩手		9	20	38	38	18	69		89	166	739	1261	25	2182
宮城		2	2	3	3	1	10		4	113	49	35	1	188
秋田		1	22	27	26	1	63		1	50	157	227	1	446
山形		1	12	17	17	4	33		1	59	67	69	4	179
福島			10	17	8	2	24			40	169	36	3	241
茨城	2	1	8	74	41	8	92	12	1	10	636	160	16	803
栃木				1	2		2				99	11		106
群馬		4	4	31	18	7	44		7	4	100	59	15	152
埼玉	1	1	8	9	10	3	24	1	1	15	81	120	6	217
千葉	13	2	15	70	39	3	105	24	2	15	393	359	7	788
東京		2	71	21	18	2	104		2	246	60	71	2	373
神奈川			13	23	4	2	38			58	38	11	2	108
新潟			10	10	2	1	17			127	53	4	1	183
富山	1	2	41	24	20		64	4	6	112	50	37		180
石川			12	16	9	2	24			33	117	113	3	168
福井			2	2			4			2	4			6
山梨		2	69	18	12	14	89		12	1319	76	22	39	1469
長野	1	1	195	55	31	1	251	1	1	812	256	96	1	1167
岐阜			24	12	8	4	32			59	22	35	4	105
静岡			10	12	7	9	31			18	16	10	9	53
愛知	3	1	2	8	25	1	34	4	3	2	63	147	2	218
三重	1			1	2		3	1			1	2		3
滋賀				2	2		3				2	5		6
京都			1	3	2		4			1	4	2		5
大阪	1			4	6		7	2			8	44		46
兵庫		1		1			2		1		1			2
奈良				2	6		8				2	193	1	195
和歌山				1	1		2				1	1		2
鳥取				1			1				1			1
島根				2	1		2				6	3		6
岡山				2			2				2			2
広島				2	1		2				3	2		3
徳島				1		4	5				1		6	7
香川					1		1					3		3
愛媛				1			1				1			1
高知				4	3	5	9				17	13	7	24
福岡					2		2					3		3
佐賀				2	3		3				7	8		8
長崎				1	1		1				108	108		108
熊本				6			6				7			7
大分				1	1		1				2	2		2
宮崎				1	2		2				1	3		3
鹿児島														
沖縄														
合計	24	33	584	578	461	107	1370	50	134	3405	3675	3774	178	10683

土偶の大量出土について——岩手県九年橋遺跡を例として——

c. 一遺跡あたりの出土点数

さきの報告書の中でもっとも興味を引くことは、遺跡によって出土点数に数十、数百倍もの大差のあることである。縄文時代を通じての一遺跡あたりの土偶の出土点数は、全国平均で七・八点と、十点にも及ばない。これを時期別にみても、早期二・一点、前期四・一点、中期五・八点、後期六・四点、晚期八・二点と、早期以降徐々に増加し、九年橋遺跡の属する晚期が最盛期となる。

九年橋遺跡のある岩手県では、縄文時代を通じての平均は三十一・六点で、さらに時期ごとには早期はなく、前期九・九点、中期八・三点、後期十九・四点、晚期三十三・二点と、さきの全国平均を大きく上回っている。

しかし、縄文時代全体と晩期の数値は、六百点余りの九年橋遺跡に大きく影響されたもので、これを除くと縄文時代全体は三分の二の二十二・六点、晩期も二分の一の十六・八点に減少する。岩手県は全国最多の出土地域であるが、なかでも九年橋遺跡はその二九%を占め、県内の数値を左右するほどの存在になっている。

ところで、遺跡ごとの出土点数を詳しくみると、次の二種類の遺跡が浮かび上がってくる。

① 大多数は、数点程度の少量出土遺跡

出土点数別の出土遺跡数を表2に示したが、一点のみの出土が全体の四十五%（これに十点以下を加えると八十八%）と、一点ないし数点程度が全体の大半を占めている。十点以下の割合は、早期九十六%、前期九十四%、中期九十三%、後期八十八%、晚期八十七%と、縄文時代を通じて大多数は一点ないし数点程度の出土であることが理解される。

② 中期以降、大量出土遺跡が出現

大多数の遺跡は一点ないし数点程度の出土であるが、中期以降に数十点、数百点もの土偶を出土する遺跡が出現する。表3によれば、百点以上を出土した遺跡は十六遺跡（五十点以上は三十一遺跡）が確認されている。その分布は、近畿と九州の各一遺跡を除き、残りはすべて東北、関東、中部に存在し、偏って分布を示している。また、遺跡の形成時期は中期の二カ所以外は、すべて後期と晩期に属する。

なお、百点以上を出土した十六遺跡のうち、九百点台の釈迦堂三口神平遺跡、六点台の九年橋遺跡、三百点台の立石遺跡、二百点台の萩内遺跡を除いては、いずれも百点台であり、大量出土遺跡にも格

表2 出土点数別の遺跡

出土点数	一	十	二十	五十	百	二百	五百	千	合計
北海道	40	29	2	3					74
青森	25	37	5	7		1			75
岩手	15	32	11	4	1	3	2	1	69
宮城	2	4	1	1	2				10
秋田	22	30	7	3		1			63
山形	14	12	6	1					33
福島	4	13	3	4					24
茨城	34	43	7	3	5				92
栃木	1					1			2
群馬	22	18	3	1					44
埼玉	13	8	2			1			24
千葉	50	40	8	5		2			105
東京都	56	45	1		2				104
奈良	24	13		1					38
新潟	3	11	1		2				17
富山	28	33	3						64
石川	10	10	3		1				24
福井	3	1							4
山梨	42	36	5	3	1	1		1	89
長野	115	110	17	9					251
岐阜	18	13		1					32
静岡県	19	12							31
愛知	15	14	2	2	1				34
三重	3								3
滋賀	2	1							3
京都	3	1							4
大阪	1	5		1					7
兵庫県	2								2
奈良	6	1							8
和歌山	2					1			2
鳥取	1								1
島根		2							2
岡山	2								2
広島	1	1							2
徳島	3	2							5
香川県		1							1
愛媛	1								1
高知県									
福岡	5	4							9
佐賀	1	1							2
長崎	1	2							3
熊本						1			1
大分	5	1							6
宮崎		1							1
鹿児島	1	1							2
沖縄									
合計	615	588	87	49	15	12	2	2	1370

土偶の大量出土について——岩手県九年橋遺跡を例として——

差があるものと思われる。

③ 極端に集中する大量出土遺跡がある

山梨県には土偶を出土した遺跡が八十九カ所あるが、そのうち釈迦堂三口神平遺跡は一遺跡で県内の六十三%を出土し（これに隣接する塚越北A遺跡と野呂原遺跡を加えると七十七%となる）、極端な集

中を示している。

栃木県では後藤遺跡の百五点以外は、わずかに一遺跡からの一点のみとなっている。また、奈良県でも八カ所のうち、檀原遺跡のみで県内の九十五%を占め、さらに熊本県の上南部遺跡は県内のすべてを出土している（九州全体でも七十%となる）。



表3 大量出土遺跡

所在地	遺跡名	点数	早期	前期	中期	後期	晩期	他	備考
青森県青森市	近野	113				113			
岩手県稗貫郡大迫町	立石	302		2	4	262	4	30	
同 盛岡市	萩内	254				*244	* 59		後～晩期49
同 紫波郡都南村	手代森	191				12	179		
同 稗貫郡大迫町	小田	130				12	113	5	
同 北上市	九年橋	641					635	6	
同 稗貫郡石鳥谷町	安堵屋敷	140					140		
秋田県秋田市	地方	128					128		
栃木県下都賀郡藤岡町	後藤	105				* 99	* 10		後～晩期 4
埼玉県北埼玉郡川里村	赤城	111				* 40	* 73	5	後～晩期 7
千葉県佐倉市	吉見台	133				* 68	* 74		後～晩期 9
同 市原市	西広 貝塚	140				29	108	3	
山梨県東八代郡一宮町	釈迦堂三口神平	920			917	1		2	
同 同 同	釈迦堂野呂原	135			132		3		
奈良県橿原市	橿原	186					186		
熊本県熊本市	上南部	108				*108	*108		後～晩 108
岩手県岩手郡雫石町	塩ヶ森 1, 2	57		* 55	* 56				前～中期54
宮城県刈田郡七ヶ宿町	大築川	59			57	2			
同 気仙沼市	田柄 貝塚	52				* 39	* 27		後～晩期15
茨城県水戸市	金洗沢	93				* 81	* 13		後～晩期 1
同 稲敷郡東町	福田 貝塚	99				* 87	* 13		後～晩期 1
同 同 江戸崎町	椎塚 貝塚	81				* 71	* 6	7	後～晩期 3
同 高萩市	小場	72				* 61	* 13		後～晩期 2
同 北相馬郡利根町	立木 貝塚	66				* 59	* 13		後～晩期 6
東京都八王子市	神谷原	53			53				
同 町田市	なすな原	56				* 19	* 38	1	後～晩期 2
新潟県南蒲原郡栄村	吉野屋	60			60				
同 長岡市	岩野原	65			40	* 25	* 1		後～晩期 1
石川県石川郡野々市町	御経塚	78				* 65	* 75		後～晩期62
山梨県東八代郡一宮町	釈迦堂塚越北A	78		11	65	2			
愛知県豊川市	麻生田大橋	77					77		

百点以上が六カ所、五十点以上が一カ所と、もつとも大量出土遺跡が集中する岩手県では、この七カ所からの千七百十五点が県内全体の七十九%を占め、極端に異なる多数の少量出土遺跡と少数の大量出土遺跡の存在を示している。

②の大量出土遺跡に属する九年橋遺跡からは、一カ所で全国の約六%にあたる六百六十七点が出土したが、これは山梨県の釈迦堂三口神平遺跡（中期）の九百二十点に次ぐもので、第三位の立石遺跡の三百二点を大きく引き離している。

#### d. 岩手県における出土点数

九年橋遺跡が存在する岩手県は、出土遺跡数は全国第八位の六十九遺跡であるが、出土点数は第一位の二千八百八十二点で、また百点以上の大量出土遺跡も最多の六カ所となっており、全国でもっとも土偶が密集した地域になつている。

その岩手県では、

①わずか十%の遺跡から、七十九%の土偶が出土している。残る二十一%の土偶は、九十%の遺跡（六十遺跡）から出土した。

②一点のみの出土遺跡が十五カ所、二点から十点までは三十二カ所で、全体の六十八%は一点ないし数点程度の出土となつている。

このように、岩手県では六十二カ所の少量出土遺跡と七カ所の大量出土遺跡の二種類の遺跡が共存し、後者から前者への土偶の供給、あるいは前者から後者への土偶の集積などが推測される。なお、九年橋遺跡は一カ所で県内全体の二十九%を出土しており、特に拠点となる遺跡であつたものと思われる。

岩手県内のすべての土偶出土遺跡を、明治初期の行政区分をもとに配列し、それぞれの出土点数を表4に示した。表4は県内を十二の地域に区分しているが、出土遺跡数と出土点数の両面において内陸部に多く、沿岸部に少ないことが明らかになつたが、それらは次のような特徴を持つている。

①大量出土遺跡は内陸中央部に集中する

十二の地域区分のうち、五十点以上を出土した大量出土遺跡は、北上川上流域の盛岡市・岩手郡内に二カ所、紫波郡内に一カ所、また中流域の稗貫郡内に三カ所、北上市内に一カ所と、すべて内陸中央部に集中し、県北部や県南部、沿岸部などには存在し

表4-1 岩手県内の土偶出土遺跡とその出土点数

所在地	遺跡名	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	未記	合計	備考
二戸市	上里		* 8	* 9					9	前~中期 8
同	荒谷A			1	1				2	
同	家ノ上			1					1	
同	沢内				3	1			4	
同	関沢口					2			2	
二戸郡安代町	五庵3			1	* 4	* 3			6	後~晩期 2
同 同	扇畑2				4				4	
同 同	水神				2	1	1		4	
同 同	赤坂田1				2				2	
同 同	曲田1					8			8	
同 同	五庵1						1		1	
同 一戸町	(不明)				1	2			3	
久慈市	二子貝塚					1			1	
九戸郡軽米町	吠屋敷1 a			* 2	* 2	2	1		6	中~後期 1
同 同	君成田4			* 1	* 15	2	2		19	中~後期 1
同 同	馬場野2					31		1	46	
同 同	駒板					9			12	
同 同	大日向2				* 3	* 1			3	後~晩期 1
同 同	(不明)					2		1	13	
同 九戸村	田代			1					1	
盛岡市	繫5			9	1				10	
同	萩内				*244	* 59			254	後~晩期40
岩手郡雫石町	塩ヶ森1, 2		* 55	* 56					57	前~中期54
同 同	元御所1		6						6	
同 同	下長谷地		5						5	
同 同	町場3					7	1		8	
同 同	桜松					2			2	
同 岩手町	川口2					1			1	
同 西根町	上斗内3					10	1	1	12	
同 滝沢町	湯舟沢2区					7	4	1	12	
同 松尾村	長者屋敷			1			1		2	
上閉伊郡大槌町	崎山弁天				4	1			5	
紫波郡都南村	湯沢			* 16	* 8				16	中~後期 8
同 同	手代森				12	179			191	
稗貫郡大迫町	立石		2	4	262	4		1	302	不要29
同 同	観音堂			8	3				11	
同 同	屋敷				19	13			35	不要 3
同 同	小田				12	113	1		130	不要 4
同 石鳥谷町	安堵屋敷					140			140	
北上市	樺山		7	2	1			1	11	
同	滝の沢		* 4	* 42					42	前~中期 4
同	本郷			3					3	
同	神行田			2		1			3	
同	樋渡			1					1	
同	臥牛				12	4			16	
同	八天				12				12	
同	下八天				3				3	
同	宝積				1				1	
同	九年橋					635		6	641	
同	和田前					6			6	
同	成田					2			2	
同	(不明)				2				2	

史 学 第六八卷 第一・二号

七八 (七八)

表4-2 岩手県内の土偶出土遺跡とその出土点数

所在地	遺跡名	早期	前期	中期	後期	晩期	不明	未記	合計	備考
江刺市	五十瀬神社前			* 1	* 1				1	中～後期 1
水沢市	杉の堂					5			5	
同	膳性					1			1	
胆沢郡金ヶ崎町	和光6区		1	5					6	
東磐井郡千厩町	南小梨蛇王				3				3	
一関市	草ヶ沢1					13			13	
同	谷起島 Loc. A					1			1	
西磐井郡花泉町	杉則		1						1	
同	同				* 31	* 6			32	後～晩期 5
大船渡市	細浦山ノ内貝塚							1	1	
陸前高田市	川内					7	1		8	
同	中沢浜貝塚					5	2		7	
同	瀬沢貝塚					5			5	
同	川向					1			1	
同	(不明)				1	4	1		6	
気仙郡三陸町	浪板				1				1	
同	同					1			1	
	点数		89	166	739	1261	14	11	2182	
	遺跡数		9	20	38	38	12	6	69	
	1遺跡あたりの点数		9.9	8.3	19.4	33.2			31.6	

土偶の大量出土について——岩手県九年橋遺跡を例として——

ない。

なお、久慈市・九戸郡内には四十六点を、また一関市・西磐井郡内には三十二点を出土した遺跡があるが、残る六つの地域には十点を超える出土遺跡はなく、岩手県においても地域による出土点数の偏りが生じている。

② 大量出土遺跡は後期、晩期に集中する

五十点以上の大量出土遺跡は、前期～中期一カ所、後期二カ所、晩期四カ所と、時期を追うごとに増加し、晩期が最盛期となる。また、出土点数も前期～中期は五十点台一カ所、後期は二百点台二カ所、晩期は百点台三カ所と六百点台一カ所と、大量出土遺跡も晩期になると百点台と六百点の二極に分解する傾向にある。

③ 大量出土遺跡は一地域に一カ所形成される

稗貫郡内の大迫町小田遺跡と石鳥谷町安堵屋敷遺跡（共に晩期）を除き、同じ地域内には同時期の大量出土遺跡はなく、大量出土遺跡が地域内で拠点になっていた可能性がある。なお、小田遺跡は北上川の右岸、安堵屋敷遺

跡は同じく左岸にあつて、河川によつて分けられる。

④北上市内も九年橋遺跡以外は少量出土遺跡

北上市内には十三カ所の出土遺跡があるが、九年橋遺跡の六百四十一点を除くと、残りは四十二点、十六点、十二点、十一點、六點、三點三カ所、二點二カ所、一點二カ所と、九年橋遺跡とは大きな隔たりにある。

晩期に限つても、九年橋遺跡以外は六點、四點、二點、一點であつた。規模は小さいが、中期でも滝の沢遺跡の四十二點以外は、三點、二點二カ所、一點である。また、後期では臥牛遺跡と八天遺跡が共に十二點で、残りは三點、二點、一點二カ所と、同一地域内においても出土点数の大小があり、九年橋遺跡はその中でも極端に出土点数の多い遺跡であると認められる。

e. 九年橋遺跡における出土点数

これまでに述べたように、岩手県の晩期は全国でもっとも土偶が出土した時期であるが、九年橋遺跡はその中でも群を抜いて出土した遺跡である。これは北上市内に限つても、四カ所で十三點と一カ所で六百六十七點と

の大差があり、この差は後者から前者への供給、あるいは前者から後者への集積などでは説明できないほどの開きをみせている。仮に供給や集積の關係があつたとしても、その範圍はさきの地域区分をはるかに超えた広大なものであつたものと思われる。

三、九年橋遺跡における破損状態

全身揃つて作られた土偶が、発見時にはいずれかが破損し、破片になつてゐることは周知のことである。九年橋遺跡でも六百六十七點のすべてが破損し、全身の揃つたものは一例もない。さきの釈迦堂三口神原遺跡でも全身の揃つた土偶は、九百二十點中一例もない。大量出土遺跡でも、岩手県大迫町小田遺跡の一例のみで、「土偶は破損して出土する。」<sup>(4)</sup>ことを裏付けている。

大量出土遺跡での破損率の高さは、祭祀の過程での人為的な破損の根拠になると共に、ここを土偶の製作場とする説を否定する根拠にもなつてゐる。仮に、九年橋遺跡が周辺への供給基地であつたのなら、成形や乾燥、焼成の作業などの痕跡や、未使用の状態での土偶が一定の割合で出土してもよいはずである。

ところが、九年橋遺跡での破損率は高く、未使用を思

わせるものは一例もない。表5は遺跡ごとの残り具合を頭、胸、右腕、左腕、腰、右脚、左脚の七つの部分に分けて集計したもので、九年橋遺跡の調査報告書で初めて採用された。同遺跡では、七部位すべてが残るものはなく、最高は六部位を残すもの二点となる。以下、五部位二点、四部位十点、三部位十二点、二部位四十九点、一部位五百三十五点、一部位のみが圧倒的多数を占め、平均は一・二部位となる。表5に記した他の遺跡においても平均は一・五部位前後で、大多数は頭や手足などの一部位のみの破片でしかない。

土偶の破損には、廃棄時の衝撃による破損、露出中の風雨などによる破損、同じく人間などに踏みつけられたための破損、堆積中の土圧による破損など、さまざまな原因が考えられるが、これらは資料採集と接合を丹念に行えば、ある程度破損前の状態に復元することができるものである。ところが、九年橋遺跡ではこれらの作業を十分に行っても、残存数は平均で一・二部位ときわめて低く、すでに廃棄時には破損していたものと判断される<sup>(5)</sup>。

さらに、九年橋遺跡からは、破損部の修復に用いたアスファルトの痕跡を持つ土偶か十六点出土している。同じことは、安堵屋敷遺跡で六点、立石遺跡三十二点、小

田遺跡二点と多数確認されており、廃棄前にすでに破損し、修復後に再使用していることが確かめられる。以上のように、ほとんどすべての土偶が破損していることから、九年橋遺跡から出土した土偶は、製作後周辺への供給に備えて、未使用の状態で保管されていたものとは思われない。そこで、残る可能性は、

a. 九年橋遺跡で作られた土偶が、使用後同遺跡に廃棄された。その場合、土偶の使用場所は九年橋遺跡と他の場所の二通りが考えられる。後者には、なぜ使用後再び同遺跡に持ち帰り、廃棄したのかといった疑問が生じてくる。

b. 九年橋遺跡以外で作られた土偶が、ここに持ち込まれ廃棄された。この場合、同遺跡には土偶祭祀の場所、または廃棄の場所などが考えられる。あるいは、廃棄が祭祀の一部として行われた可能性も生まれてくる。

#### 四、九年橋遺跡における出土状態

前述したように、九年橋遺跡は和賀川の旧流路にできたくぼ地に形成された遺跡で、北側の丁列には市街地から続く礫層が水流によってえぐり取られた跡の段差が認



められた。同遺跡の形成は晩期中葉の大洞C<sub>2</sub>式以降で、当初は廃棄された遺物が地中に沈み込むほどの軟弱な状態で、遺構も明確ではない。やがて、C<sub>2</sub>式からA式にかけての時期に乾燥が進み、住居や石囲炉等が構築され、最終末のA<sub>1</sub>式に終焉を迎える。土偶も遺跡の存続時期に対応し、大洞C<sub>2</sub>式、A式、A<sub>1</sub>式に相当する。

筆者らが調査を担当した第三次～第十一次調査では、遺跡中央部に東西三メートル、南北三メートルの調査区（0列と15列のみは東西一メートル、南北三メートル）を、南北十列（A～J）、東西十六列（0～15）の百五十六区に区画して行われ、調査面積は千二百六十平方メートルを数えた。

遺跡の層序は、上層から洪水層、0層、1層、2層、3層、4層の六層に区分されるが、北側のJ列のみは地表直下に礫層が続く。各層の分布は、洪水層、0層、4層のように北側のF～I列に中心を置くものと、1層、2層、3層のように南側のA～E列に中心を置くものなど、層序によって分布範囲に違いをみせている。各層の時期は、おおよそ1層、2層、3層はC<sub>2</sub>式、洪水層、0層はA<sub>1</sub>式を主体にしたもので、一部にその前後のC<sub>1</sub>式とA<sub>2</sub>式が伴っている。土偶の層序別の出土点数は、洪水層

五十五点、0層百八十二点、1層百三十六点、2層百七十八点、3層六十六点、4層三十二点、その他二十八点と、0～2層が主要な包含層になっている。

表6に、土偶と同じく多数の資料が出土した石鏃類（一一五五点）、磨石類（五三二点）、石剣類（六一六点）を加えて、層序別の調査区ごとの出土点数を示した。表6からは、狩猟具（石鏃類）、製粉具（磨石類）、祭祀具（石剣類と土偶）の別なく、各層とも分布範囲や出土点数が共通しており、いずれも破損品を無造作に廃棄した状態で出土している。このことから、九年橋遺跡での土偶の廃棄は、特別な意図のもとでの廃棄ではなく、他の遺物同様の破損品を廃棄したものと判断される。なお、もつとも出土点数が多い山梨県の釈迦堂三口神平遺跡（中期）は、甲府盆地の東端の約二万平方メートルの範囲から、二百基以上の住居跡と八百基以上の土壙などが出土し、大型の集落遺跡であることが判明している。これに比べると、出土点数では九百点と六百点ほどの違いであるが、九年橋遺跡の面積は十分の一の約二千平方メートル、住居跡もわずか三基しか検出されおらず、両者には遺跡の規模や遺構の数に大きな隔たりをみせている。釈迦堂三口神平遺跡では居住や祭祀、廃棄が同じ



表6-1 九年橋遺跡における層序別出土点数

1 (洪水層)

	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J
15				
14				
13				
12				
11				
10				
9				
8				
7				
6				
5				
4				
3				
2				
1				
0				
	59	35	41	55
	石鏃類	磨石類	石剣類	土偶

2 (0層)

	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J
15				
14				
13				
12				
11				
10				
9				
8				
7				
6				
5				
4				
3				
2				
1				
0				
	177	115	83	182
	石鏃類	磨石類	石剣類	土偶

3 (1層)

	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J
15				
14				
13				
12				
11				
10				
9				
8				
7				
6				
5				
4				
3				
2				
1				
0				
	377	99	92	136
	石鏃類	磨石類	石剣類	土偶

表6-2 九年橋遺跡における層序別出土点数

4 (2層)

	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J
15				1
14		1		1
13	1 3	1 1 1	1 1 1	1 1
12	2 2 3	4 1 1 1	4 2	1 2 2 2
11	5 2 4 1	1 2 2	1 2 3 6 2	2 2 1 0 2 2
10	1 3 2 5 2	4 2 2 2	4 4 7 2	5 2
9	4 3 1 6 1	4 5 1	6 7 5 3	3 3 4 1
8	3 1 3 1	3 3 2	8 3 1	1 2 2 1
7	1 1 1 3 2 3 3 1	1 4	2 5 3 2 3 2 2	2 2 3 1 1
6	7 1 2 1 0 4 4 1	1 1 2 1 1	1 3 2 2 2	5 4 4 5 2 5 1 2 2
5	5 6 6 1 5 9 5 1 6 5 3	5 2 2 1 6 1 1	5 4 2 7 4 3 1 3 2	3 6 1 3 2 8 2
4	4 5 8 7 1 2	1 2 2 1 1	1 2 4 1 4 3 4	1 1 1 1 1 5 1
3	2 3 2 5 4 5 1	1 1 1 1	5 1 1 2	3 3 1 4 5 2
2	2 1 3 2 1 2	12 1 1	9 3 2 5	2 4 8 2 3
1	1 4 1 1 7 3 1 4	4 3 1 2	3 4 1 1 1 3	2 1 1
0	2 1 1 1 381	2 1 1 110	3 2 199	
	石鏃類	磨石類	石剣類	土偶

5 (3層)

	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J
15				
14				
13	1 2	1 1 2 1	1 3 1 2	1 1 1 1
12	1	3 2 1 4	1 4 1	1 1 2 3
11	1 1	2 1 1	2	1 1
10	2		4 1	1 1
9	1 2	1	1 1	3
8	2	1 1	1 1	3 1
7				1
6	1	3	1	2 1
5	7 8 5 2	4 3 1 2 1	2 4 4 1 1 3	1 2 3 1 1 2
4	3 2 1 1	1 1	4 3 3	2 1 1 1 1
3	5 1	1 1	1 1 1 1 1 2 1	1 1 1 2
2	2 2 8 1 2 1	2 1 3	4 4 9 2 1 1 1	5 3 1 1 1
1	4 5 3 3 1	2 1 1 1	1 4 4 1 5 1 2 1	4 1 1 2
0	2 3 4 90	1 53	3 1 1 105	1 66
	石鏃類	磨石類	石剣類	土偶

6 (4層)

	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J
15				
14				1
13		2 1 1 1	1 1 1 2 3	1 1 1
12		3 1 2 1	1	1
11		2 2	1	
10		1 1 3 1	2 1	1 2
9		3 5 2	2 1	1 2
8		3 1 0		1
7	1 1	2 1 1 6		1
6		1 4 3	1 1 1 1	
5		1 4 3 2	4 1 1 3 1	1 1 1 1 1
4	1			2
3		1	1 1	
2	1		5 1 1	3 3 1 1
1	1 1		1 2 1	2 1 1
0	1 1 10		1 2 1 55	2 1 1 32
	石鏃類	磨石類	石剣類	土偶

土偶の大量出土について——岩手県九年橋遺跡を例として——

表6-3 九年橋遺跡における層序別出土点数

7 (遺構, その他)

	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J
15			1 1	1
14			1	
13				1
12		1		
11	1		2	1 1
10				3 1
9		1 2		1
8	2 1	4		1
7	6 1	3	1 1	1 2
6	2	4 2 1	1 1	1 1
5		1 1 1	1	
4				
3	1 9	2	1	
2	1 1 2		4	
1			1 1	
0			4 1	2
	1		1	
	41	32	30	28
	石鏃類	磨石類	石剣類	土偶

8 (合計)

	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J	A B C D E F G H I J
15		1 2 2 2 2	1 1 2 3 3 1	1 1 2 3 2
14	2 1 4 1 3 3	1 4 7 3 5 5 3	4 4 3 6 4 3	1 9 8 2 18 5 1
13	2 2 3 1 3 1 3	2 2 1 8 5 5 12 5 3 1	3 4 1 3 5 6 4 6	2 2 10 10 9 1 5 5
12	4 3 6 3 5 3 4 1 1	4 4 4 2 7 6 9 3 4	5 2 5 8 2 3 1	2 1 6 11 3 4 5 2 3
11	2 10 3 9 7 5 6	5 1 1 5 1 1 2 7 3	3 2 4 7 4 4 4 7 5	4 5 4 3 1 7 8 4
10	4 7 2 9 3 2 2	8 3 5 6 7 8 10 5	7 7 4 7 2 4 5 2	4 3 11 5 4 15 2 4
9	6 6 4 7 1 1 12 12 4	6 7 9 1 2 3 4 3 18	9 9 6 4 1 2 6 5 2	10 4 3 4 8 13 1
8	7 7 4 1 1 13 14 7	9 15 7 4 5 6 8	11 3 3 2 1 5 9 4	7 8 6 1 3 10 19 5
7	19 16 6 2 3 3 6 10 8	5 10 4 2 16 7	4 11 3 2 3 4 6 9 3	5 4 1 2 2 2 9 19 3
6	11 21 16 4 5 9 30 9	4 6 3 3 5 7 14 3	3 14 5 1 4 5 8 12 1	5 6 5 3 1 11 16 6
5	16 17 13 16 11 16 29 17 1	5 6 6 2 1 11 5 2 1	8 10 6 8 4 4 4 3 3	2 12 8 6 6 4 10 16 2
4	4 12 16 1 9 10 28 19 1	1 1 4 2 3 3 1	1 7 11 2 6 1 8 6	5 7 3 1 6 4 12 2
3	34 9 24 8 11 7 12 25 1	3 2 1 2 3 1 1	7 3 13 3 4 5 5	5 1 2 3 2 5 10 9
2	40 5 13 2 4 7 13 8 3	13 3 3 1 2 2 2 8	14 8 13 6 9 3 3 2	4 10 14 2 3 7 11 3
1	24 24 21 7 7 11 17 3	6 3 1 2 3 3	7 8 11 3 6 6 4 5	2 8 16 2 8 8 1
0	5 16 18 15 12 4	4 2 1	8 3 7 4 1	1 2 4 4 1 3
	1135	524	614	677
	表採 20	表採 8	表採 2	表採 9
	石鏃類 合計 1155	磨石類 合計 532	石剣類 合計 616	土偶 合計 686

場所ので繰り広げられたのに対し、九年橋遺跡ではこのうちから居住と祭祀の痕跡が必ずしも明確ではなく、廃棄のみが際立つ様相を呈している。

## 五、まとめ

九年橋遺跡からは、全国第二位の六百六十七点の土偶が出土したが、遺跡のある岩手県は土偶がもっとも密集した地域であり、また所屬時期の晩期は土偶の最盛期であり、同遺跡はその頂点に位置している。

岩手県は土偶の出土が全国最多であるが、すべての遺跡の出土点数が多いわけではなく、大多数は一点ないし数点程度の少量出土遺跡である。しかし、約一割ほどの遺跡からは、数十、数百点もの大量の土偶を出土する遺跡があり、出土点数が極端に異なる二種類の遺跡が同時存在している。

後者の大量出土遺跡は、内陸中央部に集中し、県北部や南部、さらに沿岸部には存在しない。また、内陸中央部においても同一地域内には、一部を除き大量出土遺跡は一カ所しかなく、その周囲には一点ないし数点程度の遺跡が点在する。ここでも、出土点数が極端に異なる二種類が同時存在している。

九年橋遺跡から出土した六百六十七点は、岩手県内の晩期の合計である千二百六十一点の五十二%にあたる。仮に、同遺跡が土偶供給の拠点であったのならば、その範囲は岩手県全域を対象とするほどのものとなる。

しかし、九年橋遺跡から出土した土偶はすべて破損しており、また修復用のアスファルトの痕跡を残すものもあることから、その後の配布に備えての未使用の状態での保管ではなく、破損し、使用に耐えなくなった土偶を廃棄したものと思われる。

また、九年橋遺跡における土偶の出土状態を、狩猟具や製粉具、祭祀具のそれと比べてみると、遺物による出土状態の違いはなく、いずれもが無造作に捨てられており、破損したものに對する特別な扱いは感じられず、廃棄行為に意義を見いだすことは困難である。

九年橋遺跡同様、大量の土偶が出土した釈迦堂遺跡群は、甲府盆地の東端に形成された巨大な集落遺跡であつて、約二万平方メートルの範囲からは数百基の住居跡などが検出された。ここでは居住地域の脇に祭祀の場があり、その付近から大量の土偶が出土し、すべての機能を備えた拠点遺跡となっている。これに對して、規模の小さい低湿地遺跡である九年橋遺跡は、三基の住居跡と十

三基の石囲炉以外には居住を示す痕跡は希薄で、大人数による恒常的な遺跡とは言いがたいものであった。

和賀川の旧流路のくぼ地にできた同遺跡は、花粉分析によっても、春の融雪期などには冠水や水没を受けており、当初から居住には適さない場所であった。このような場所に築かれた三基の住居跡は、六百六十七点もの土偶を保持した人々の住居としてはあまりにも少なく、同遺跡以外から土偶が持ち込まれたのではないかと想像することもできる。

これまでのところ、九年橋遺跡の内外からは土偶祭祀をうかがわせるような痕跡は発見されていない。そのため、出土した六百点余りの土偶の祭祀が、どこで行われたのかは定かではない。この結果を尊重すれば、九年橋遺跡での祭祀は考えにくく、他所での祭祀後ここに運び込まれ、廃棄されたことになる。このような、破損品の廃棄を主な目的として形成された遺跡は、これまでに例がなく、結論を得るためには今後更に慎重で、詳細な吟味を必要としている。

以上、これまでの調査所見によれば九年橋遺跡における土偶の大量出土は、すべてが破損していることから、同遺跡を製作場とみることは困難である。また、検出さ

れた住居跡の数から、すべての土偶がこの居住者によつて管理されていたとしても困難である。出土土偶の肉眼観察によれば、使用粘土の違いから複数の製作地も予想され、周辺地域からの搬入も可能性のひとつとして考慮すべきものになってくる。

従来の土偶研究は、形態や文様による編年研究と、特殊な出土状態からの祭祀の復元、さらに意図的な土偶破損などに主眼が置かれ、出土点数にはまったく関心を寄せることがなかった。しかし、出土点数の検討は土偶の製作、供給、祭祀、破損、廃棄といった土偶の一生を解き明かす有効な資料になり、今後の土偶研究の重要なテーマになるものと期待されるものである。

## 注

- (1) 筆者はすでに、土偶について破損状態、遺構内出土、地域ごとの出土点数などについて、その成果を発表している(藤村八三・八五・九一・九二a・九二b・九四)。
- (2) すべての資料について所属時期の判定が行われたが、破損などによつて特定が困難な場合はあえてひとつの時期に限定せず、予想される複数の時期に重複して数えられている。そのため、時期別の総合計と全体の合計とが一致しないこともある。

(3) 九年橋遺跡の第二次から第十一次調査において、土偶

は六百六十七点出土し、内容は各年次の調査報告書に記載されている。ところが、「土偶とその情報」研究会による収録は、同遺跡の遺物整理の完了前に行われたため、一部未収録資料が生まれ、出土点数は六百四十一点になっている。

(4) 九年橋遺跡における遺物の出土点数と破損率は次の通りで、極端に点数が少ないものを除けば、土偶や石剣類は群を抜いて高い。

(石製品) 石鏃類一一五五五一点一%、石錐二九三三点四五%、石匙一五五五二点二%、不定形搔器一二二点二四%、打製石斧九一点五〇%、篋状石器一二三三三三%、横刃形削器八点一二点、磨製石斧一〇四八八%、円盤状石製品七六五五五一点六%、磨石類五三三三三三%、石皿一一四八七%、砥石二点五〇%、礫石錘一点〇%、有溝石製品一四八八六%、石剣類六二二点一〇%、岩版一三一点一〇%、独鈷石六点六七点、石冠四二五%、石製垂飾品九点一〇%、石製玉類九〇点二七%、異形石製品一五五五五一点七%

(土製品) 土偶六六七点一〇%、土版四七九四%、土面一点一〇%、土製耳飾六七点一六%、円盤状土製品五五九五五三%、石冠形土製品三二一〇%、亀形土製品二点一〇%、異形石製品九点八七%

(土器) 深鉢形五六六八八%、台付深鉢形一四八八%、鉢形一三〇八六三%、台付鉢形一〇八五五五%、浅鉢形五三〇点六七%、台付浅鉢形二八八七二%、壺形八〇三六八%、注口五二点七一%、片口一点〇%、香

炉形五五八〇%、蓋形七五八六%、匙形三六六七%  
(5) 九年橋遺跡出土土偶のうち、頭を伴っている資料が十六点、頭のみ破片は百七点あり、合わせて百二十三点の頭が出土している。この数は同遺跡から出土した土偶の最小の個体数となるが、これだけでも周辺の遺跡からの出土数を大きく上回っている。なお、同じ岩手県では安堵屋敷遺跡三重六六%、立石遺跡二五五五%、小田遺跡二一九九%となる。

藤村東男

一九八三「岩手県九年橋遺跡出土土偶の損壊について」

(萌木、第一八号)

一九八五「岩手県九年橋遺跡出土石剣類の損壊について」

(古代、第八〇号)

一九九一「岩手県九年橋遺跡出土土偶残存部位別目録」

(萌木、第二六号)

一九九二a「遺構内出土土偶について」(萌木、第二七号)

号)

一九九二b「土偶損壊論争関係文献目録」(岩手考古学、

第四号)

一九九四「出土点数から見た土偶祭祀」(慶應義塾女子高等

学校研究紀要、第十二号)

北上市教育委員会

一九七七「九年橋遺跡第三次調査報告書」(北上市文化財

報告書、第十八集)

一九七八「九年橋遺跡第四次調査報告書」(同、第二三

集)

土偶の大量出土について——岩手県九年橋遺跡を例として——

一九七九『九年橋遺跡第五次調査報告書』(同、第二五集)

一九八〇『九年橋遺跡第六次調査報告書』(同、第二九集)

一九八四『九年橋遺跡第七次調査報告書』(同、第三五集)

一九八五『九年橋遺跡第八次調査報告書』(同、第三九集)

一九八六『九年橋遺跡第九次調査報告書』(同、第四二集)

一九八七『九年橋遺跡第十次調査報告書』(同、第四四集)

一九八八『九年橋遺跡第十一次調査報告書』(同、第四七集)

一九九一『九年橋遺跡第十次調査報告書(補遺)』, 同、第五六集)

甲野 勇

一九二九「日本石器時代土偶概説」(日本原始工芸概説』  
八重樫純樹・小林達雄

一九九二「土偶資料を例とした資料情報化研究——コン  
セプトと研究経緯、その課題——」(国立歴史民俗博

物館研究報告、第三七集)  
八重樫純樹

一九九二「時期別土偶出土数データの集成」(国立歴史民  
俗博物館研究報告、第三七集)